

## 震災復興橋梁における意匠の地理的分布に関する研究\*

A Study on the detail design of Kanto Earthquake reconstruction bridges considering their location

藤野 聰史\*\* 窪田 陽一\*\*\* 深堀 清隆\*\*\*\*

By Satoshi FUJINO Yoichi KUBOTA Kiyotaka FUKAHORI

### 概要

大正12年9月1日に発生した関東大震災は、帝都東京や横浜をはじめとする関東南部の広い地域に大きな被害をもたらした。そして震災後の復興が急ピッチに進められていく中で、多くの橋梁が架設された。本研究では、帝都復興事業において架設された震災復興橋梁を対象とし、震災復興橋梁の意匠に着目して東京の地域特性との関係を明らかにすることを目的としている。そこで文献調査や当時の図面や写真などを参考にし、震災復興橋梁における意匠の地理的分布に関する分析を行った上で、橋梁の意匠分析と地域特性との関係を考察した。

### 1. はじめに

#### (1) 背景

帝都復興事業において425橋の橋梁が架設され、そのうちの115橋を復興局が架設したという。そこで、震災復興橋梁を地域的観点からみた研究には、岡田、伊東ら及び福島、中井らによる研究がある。岡田、伊東らの研究では、構造形式の検討は都市景観を考慮して行われ、地域により差をもたせていたことが論じられている<sup>1)</sup>。また、福島、中井の研究では、隅田川六橋を除く、115橋の震災復興橋梁について、架橋地点の場所性を加味して型式配置が行われた可能性を指摘している<sup>2)</sup>。そこで本研究では、今までに着目されていない細部の意匠という観点から震災復興橋梁と地域との関係性を論じるものである。

橋梁の意匠を決定する要因には様々な要因があると考えられる。例えば過去に日本橋が木橋から石造アーチに造り替えられた要因には、「旧江戸時代を偲ぶために純日本式の木橋を架設しようとしたが、主要材料が木材であると頻繁に修復し直さなければならず、架替えを要するので交通の阻害になってしまう」という事で、耐久年数の長い建築材料として石材を使用することが決定された。そして、橋梁の型式としてはアーチ型が最も美観上に優れているとして石造アーチ型の採用が決定し、西洋式となったのである。さらに装飾に関しては、西洋式と決定した上で調和を図ろうとしたが、一部の人々から非難を

浴び、その結果、西洋趣味と日本趣味の折衷様式を採用することとなったのである。」と造り替えられて一年後に発行された「開国記念日本橋誌」に書かれている<sup>4)</sup>。

そこで震災復興橋梁の意匠についても、そのような要因が関係していると考えられるが、本研究では橋梁の意匠の地理的分布に着目しつつ、特に親柱と高欄について意匠のバリエーションにどのようなものが存在したかを考察することとする。

#### (2) 研究概要

##### a) 対象橋梁

震災復興橋梁（大正12年の関東大震災を期に、架橋又は架替えされた橋梁）を対象とし、その中でも当時の写真や図面が残されており、親柱と高欄について意匠の様式分析のできるものを本研究の対象橋梁とした。

橋梁数としては、親柱は151橋、高欄は181橋について様式分析を行なった。

##### b) 研究方法

まず、対象橋梁の意匠の特徴や用いられている建築様式が共通認識として定まっている建築物の写真などと照らし合わせて様式分析を行い、さらに地理的分布（配置関係の把握）を確認するために、古地図上<sup>5)</sup>に当時、橋梁が存在した（存在する）位置が概ねわかるようにプロットを行った。

### 2. 親柱および高欄にみられる意匠

#### (1) 親柱

##### a) 留柱

本研究における留柱とは、特別に目立った装飾は施されておらず、機能のみを果たす親柱とする。そして本研究における留柱は、主に4種類の親柱のデザインに分類することができた。

\*keyword : 橋梁、意匠、地理的分布

\*\*学生員 工修 埼玉大学大学院 理工学研究科

\*\*\*正会員 工博 埼玉大学大学院教授

\*\*\*\*正会員 博(学術) 埼玉大学大学院助教授  
(〒338-0825 埼玉県さいたま市下大久保 255)

#### • 四角柱型

基本的な形は縦長の立方体であり、多少の装飾は見られるものの中にはあるが、様式判定が行えないような装飾においては留柱とした（図-1）。

#### • 水平断面がL型

高欄と同じくらいの高さのものがほとんどであり、水平断面で見るとL型（もしくは、それ以外の多角形）の形で構成されているものとする（写真-1）。

#### • 円柱型

円柱型のもので、高さもそれほど高くないものとする（図-2）。

#### • その他

上記の3種類以外の型のもので、特に目立った装飾のなされていないものとする（図-3）。

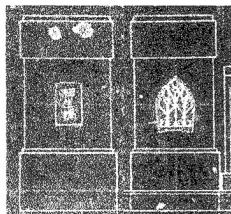


図-1 相生橋（深川区）の親柱<sup>6)</sup>

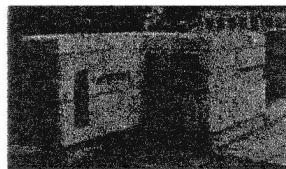


写真-1 茅場橋の親柱<sup>7)</sup>

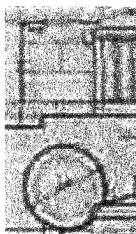


図-2 松代橋の親柱<sup>6)</sup>

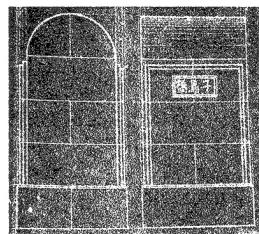


図-3 千鳥橋（日本橋区）の親柱<sup>6)</sup>

#### b) 和風の親柱

##### • 摱宝珠タイプ

この親柱は柱頭に擬宝珠がついているのが特徴である。この擬宝珠は、日本古来から神社や寺院の本殿などの高欄の柱頭などにつける宝珠飾りとして使用されているものである（写真-2）（撮影：藤野 2003）



##### • 頭巾タイプ

この親柱は頭巾金物が柱頭に付いているのが特徴である。この頭巾は擬宝珠と同様に、日本古来から神社や寺院用いられていたものである。頭巾タイプの高欄は主に外部との境を現す柵に用いられていた（図-4）。

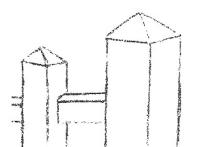


図-4 頭巾型高欄  
(イラスト：藤野)

##### • その他のタイプ

擬宝珠タイプでも頭巾タイプもないが、和風の要素を感じられるもの。写真-3, 4に記したように、親柱は屋根の形や横に長い面が存在し、寺の本堂のイメージを受けることなどから、本研究では、雉子橋は和風の親柱であると分析した。

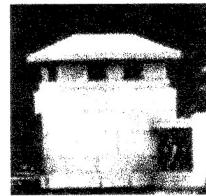


写真-3 (左図) 雉子橋の親柱<sup>7)</sup>

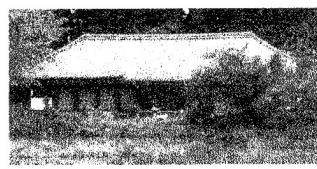


写真-4 (右図) 浄瑠璃寺本堂／1107年<sup>9)</sup>

#### c) 新古典主義的親柱

18世紀中頃から19世紀初頭にかけて現れた建築的動向を新古典主義と呼び、これは古典の本質を見失った自由な解釈による装飾過多なバロックやロココ様式に対する批判のもとに生まれた様式である。<sup>9)</sup>

特徴としては、考古学的正確さを重視していることや、全体の構成にも幾何学的要素の中に明快さがあることであり、例として明石橋の親柱には今までの装飾過多の傾向が頭部の方に見られるが全体的な古典的趣に加え幾何学的な形として仕上げられている（図-5）。

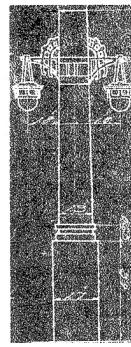


図-5 明石橋の親柱<sup>6)</sup>

#### d) 近代建築的親柱

近代建築様式については、建築を含め美術や音楽など他の様々な芸術的要因が取り込まれており様式分析を確定的に行なうことは非常に困難であった。本研究では、下記のようにアール・デコを含めた3パターンの様式に分類を行い、古地図上に印すこととした。

##### • 表現派

近代建築家像を、主観的に探ろうとする表現派は、過去の様式からの分離を唱えた新たな時代に相応しい芸術の創造を目的としたものである。<sup>9)</sup>

参考として江戸橋の親柱を挙げる。図-6に示す「労働記念堂案」はドイツ表現主義であると紹介されており、江戸橋の鋭利なイメージはこの表現主義の趣を感じさせてるので、ここでは江戸橋の親柱を表現主義であると解釈する。



写真-5 (左図) 江戸橋の親柱<sup>7)</sup>

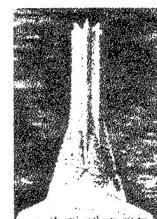


図-6 (右図) 労働記念堂案／1919年<sup>10)</sup>

##### • 構成派

表現派の対極に立ち、近代建築の造形理論を客観的に確立しようとする構成派はソヴィエト構成派（ロシア構成派）などと呼ばれる。構成派は社会革命を背景とし社会主義という新しい社会に即応した芸術の存在意義を、

鑑賞のための芸術でなく、その社会性に見出したものであった<sup>9)</sup>。

ここでも参考として、菖蒲橋の親柱を挙げる。他の親柱にない立方体の構成であり、上部の方に重量感を感じるデザインとなっている。また不安定そうな形は、写真-7に示すようなアール・デコとは違ったソヴィエト構成派の印象を受ける。

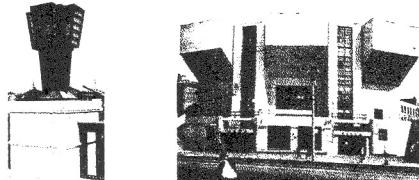


写真-6 (左図) 菖蒲橋の親柱<sup>8)</sup>

写真-7 (右図) ルサコフ・クラブ／1929年<sup>10)</sup>

#### • アール・デコ

アール・デコは統一された造形理念もなく、デザインは一様ではなかったが、直方体などの幾何学形態および定規やコンパスで描ける直線や曲線を組み合わせた模様によるものが主流であった。

そこで本研究では、より明瞭にアール・デコの特徴(写真-8,9)を有しているものをアール・デコ調とし、多少なりともこの特徴を感じさせるものを準アール・デコ調として分類して扱うこととした。

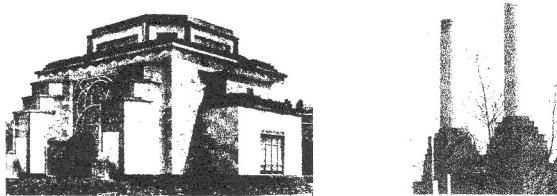


写真-8 (左図)

パリ万国装飾美術博覧会ボンマルシェ館、1925年<sup>10)</sup>

写真-9 (右図)

バターシー発電所、1934年<sup>9)</sup>

代表的な親柱として親父橋を挙げると、親柱の構成はアール・デコの特徴でもある直方体の幾何学的な構成からなっており、本研究で親父橋は、アール・デコ調と解釈した(写真-10)。

#### e) 中華様式

中華様式においては本研究では、鞍掛橋にのみが該当した様式である。写真-12の永保寺開山堂は12世紀末に宋から伝えられた建築様式であり、屋根が軒先でつよく反りあがっているのが特徴として取り上げられる。鞍掛橋にも、そのような特徴が見受けられるので本研究では、中華様式の親柱と解釈した。

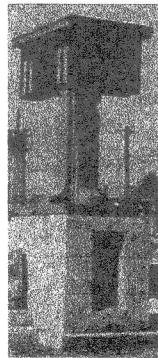


写真-10

親父橋の親柱<sup>7)</sup>



写真-11 (左図) 鞍掛橋の親柱<sup>7)</sup>

写真-12 (右図) 永保寺開山堂／室町時代<sup>9)</sup>

#### f) ロマネスク調親柱

ロマネスク調の親柱については新堅川橋にのみが該当する。立方体や円筒の組み合わせ(図-8)はロマネスク様式の特徴でもあり、新堅川橋の親柱はこのような特徴を有していると考える。

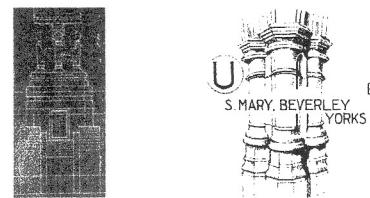


図-7 新堅川橋の親柱<sup>6)</sup>

図-8 代表的なロマネスク様式の柱<sup>11)</sup>

#### (2) 高欄

##### a) 無装飾高欄

本研究における無装飾高欄とは、本来の高欄の機能を満たすための縦や横の桟のみで構成されているものとして、3種類の高欄について分類することができた。

##### • 縦桟型

主に縦の要素が目に付く高欄であり、多少の凹凸などの装飾性のあるものも見られるが、様式分析において影響のないものは、この縦桟型の高欄とした(図-9)。

##### • 横桟型

主に横の要素が目に付く高欄であり、本研究の調査では桟がパイプ状からなる丸みを持ったものが多く見られた(図-10)。

##### • その他

上記以外の無装飾高欄であり、桟の構成でないものも装飾性が乏しいと考えられた場合には、この分類に含めた(写真-13)。

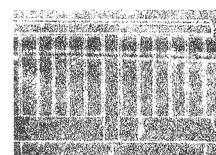


図-9 長崎橋の高欄<sup>6)</sup>

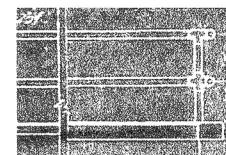


図-10 元木橋の高欄<sup>6)</sup>

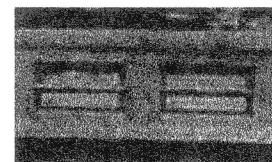


写真-13 飯田橋の高欄<sup>7)</sup>

##### b) ルネサンス調高欄

高欄の一部に半円アーチが施されているなど、ルネサ

ンス様式の特徴を有しているものをルネサンス調と解釈する。例として練兵橋の高欄を挙げる。(写真 - 14)。

#### c) ゴシック調高欄

ルネサンス調と同様に、高欄の一部に尖頭アーチが施されているなど、ゴシック様式の特徴を有しているものをゴシック調と解釈する。例として五一 A 橋の高欄を挙げる(図 - 11)。

#### d) 石張高欄

石張であることは建築様式による装飾ということはできないが、意匠上の特徴と考え無装飾高欄とは区別する(写真 - 15)。



写真 - 14 練兵橋の高欄<sup>7)</sup> 図 - 11 五一 A 橋の高欄<sup>6)</sup>

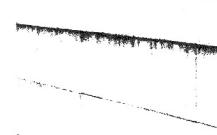
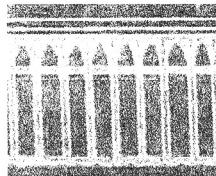


写真 - 15 数寄屋橋の高欄<sup>8)</sup>

#### e) I 型断面材が高欄の機能を兼ねているもの

この I 型断面材は高欄と言っては語弊があると思われるが、図面の中に同様のものが 11 橋確認することができた(図 - 12)ので、本研究ではこの I 型断面材も高欄の機能を兼ねかつ意匠上の特徴の一つと考え、古地図上に記すことにした。



写真 - 15 豊島橋  
(撮影: 渡辺、1996)

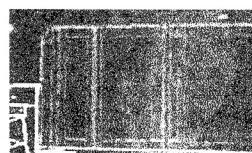


図 - 12 豊島橋の側面図<sup>6)</sup>

#### f) 和風の高欄

##### ・ 擬宝珠タイプ

親柱と同様に、柱頭に擬宝珠が付いているのが特徴である。高欄の特徴としては、笠木の部分が丸くなっていることや支柱に飾りが付いている特徴などが挙げられる。

##### ・ 頭巾タイプ

親柱と同様に、柱頭に頭巾金物が付いていることが特徴である。高欄の特徴としては、笠木の部分が角張っている特徴などが挙げられる。

##### ・ その他のタイプ

和風高欄の擬宝珠や頭巾タイプでないものには、雉子橋の高欄が挙げられる。この高欄の刀の鍔をモチーフにしたと思われるデザインが施されており、和風の趣を感じ取ることができる。このように和風の事物をモチーフとしたものをその他のタイプとする。

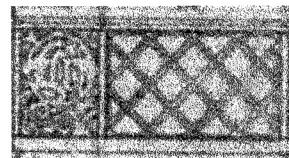


図 - 13 雉子橋の高欄<sup>7)</sup>

#### g) 新古典主義的高欄

新古典主義の特徴でもある幾何学的要素の中に明快さがあることは親柱でも考察したが、築地橋の高欄においては、シンプルな高欄の中に幾何学的な装飾が施されていることなどから本研究では築地橋の高欄を新古典主義的であると解釈した(図 - 14)。

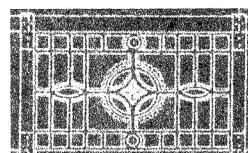


図 - 14 築地橋の高欄<sup>6)</sup>

#### h) 近代建築の高欄

##### ・ 表現派

表現派の高欄は、江戸橋にのみ見受けられた。江戸橋の高欄は親柱のデザインと同様に表面が鋭利なデザインとなっている。これは表現派の事例である写真 - 16 と類似したデザインであると考え、本研究では江戸橋の高欄は表現派であると解釈した。

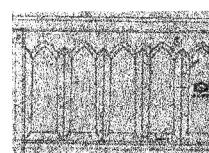


図 - 15 江戸橋の高欄<sup>7)</sup>

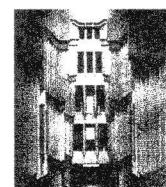


写真 - 16 I.G. 染料会社事務棟／1924 年<sup>10)</sup>

##### ・ 構成派

図 - 17 のように構成派の建築物は非対称な形の集合体であり、立体的なイメージを持つものが多い。高欄においてはこのような立体的特徴はあまり見出せなかつたが本研究では、非対称な形の集合でキュビズム的なイメージを感じ取れるものを構成派として解釈した。

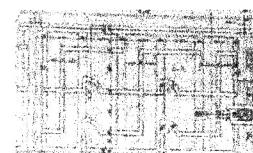


図 - 16 茅場橋の高欄<sup>7)</sup>



図 - 17 ブルメーレンドの工場案  
／1919 年<sup>10)</sup>

##### ・ アール・デコ

アール・デコの一般的な見解は親柱と同様である。幾何学的な形が特徴である。ここで明瞭敵にアール・デコの特徴が表れている高欄として東新川橋の高欄について考察する。東新川橋の高欄にはめ込まれているパネルに

は、親柱で考察した定規やコンパスで描ける直線や曲線の組み合せた模様が明瞭に表れていると分析したので、東新川橋の高欄はアール・デコ調であると考える（図-18）。

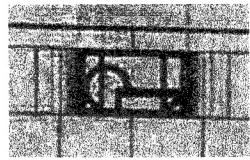


図-18 東新川橋の高欄<sup>7)</sup>

#### i) ロマネスク調高欄

ロマネスク調高欄は新堅川橋にのみ該当していた様式なので、新堅川橋を参考とする。図-20はロマネスク様

式のお城などに多く使われていた窓であり、新堅川橋の高欄にも類似すると思われるデザインが施されていることから、本研究では新堅川橋の高欄をロマネスク調高欄であると分析した。

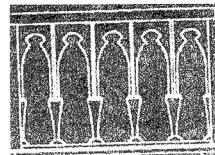


図-19 新堅川橋の高欄<sup>6)</sup>

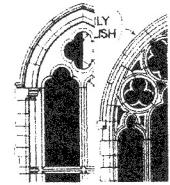
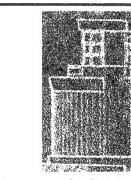
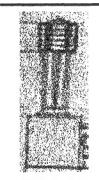
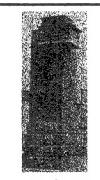
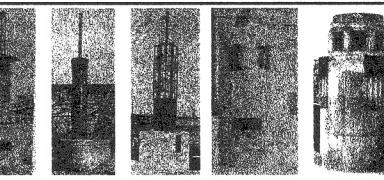
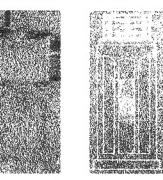
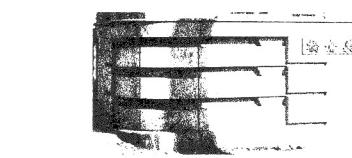
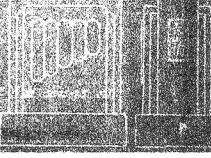
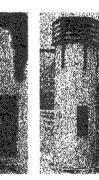
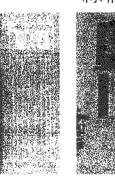
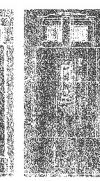
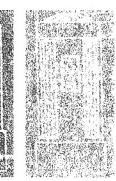
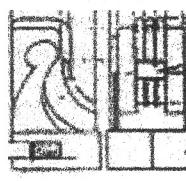
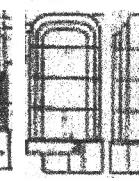


図-20  
ロマネスク様式の代表的な窓<sup>11)</sup>

表-1 親柱の様式分析一覧<sup>12)</sup>

	四角柱型	
	水平断面 がL型	
留柱	水平断面 がL型	
	円柱型	
	その他	
	擬宝珠 タイプ	
和風 の 親柱	頭巾タイプ	 頭巾タイプの親柱は、図面からすべて で64橋確認することができた。
	その他	

新古典主義的親柱													
	表現派												
	構成派												
近代建築的親柱	アール・デコ調												
													
	準アール・デコ調												
													
	中華様式												
	ロマネスク調親柱												

形が特殊で判定不可能なもの	
	小田原橋

表 - 2 高欄の様式分析一覧<sup>12)</sup>

無装飾高欄	縦桟型	清洲橋  言問橋  蔵前橋  清洲橋  豊海橋  柳橋  大和橋  菖蒲橋  駒形橋  長崎橋  竹森橋 大栄橋  千鳥橋(日本橋区)  稲荷橋  松代橋  六〇I橋  二二A橋  翼橋
	横桟型	緑橋  要橋  千鳥橋(深川区)  元木橋  四二A橋  四〇B橋  五二B橋  五九C橋 一二二A橋  柳島橋
	その他	飯田橋  市ヶ谷橋
ルネサンス調高欄		練兵橋 法恩寺橋 松永橋 一〇六B橋
ゴシック調高欄		兜橋 江東橋 相生橋(深川区) 五一A橋 七九A橋
石張高欄		数寄屋橋 聖橋 枕橋 土橋
I型断面材が高欄の機能を兼ねているもの		鶴壽橋 入船橋 富士見橋 豊島橋 吉岡橋 福永橋 豊平橋 新開橋 伊東橋 聖天橋 豊木橋
和風の高欄	擬宝珠タイプ	弁慶橋
	頭巾タイプ	平野橋 平井橋 高砂橋 頭巾タイプの高欄は、図面からすべてで64橋確認することができた。
	その他	雛子橋 堀留橋
新古典主義的高欄		築地橋 萬世橋
近代高欄建築	表現派	江戸橋

	構成派	 美倉橋	 常盤橋	 鞍掛橋	 赤羽橋	 小網橋	 茅場橋	
	アール・デコ調	 鎌倉橋	 東新川橋	 一ツ橋	 玉出橋	 西仲之橋	 四二B橋	
近代建築の高欄		 三吉橋	 菊川橋	 水谷橋	 業平橋	 南浜橋	 海運橋	 竹橋
		 京成橋	 小石川橋	 鹿島橋	 佐久間橋	 新月橋	 厩橋	 甚兵衛橋
準アール・デコ調		 一二〇A橋	 新三崎橋					 八重洲橋
		 親父橋	 一ノ橋	 横川橋	 後楽橋	 孝慈橋	 小田原橋	 萬年橋
		 蓬萊橋		 松井橋				
		 東仲之橋	 比丘尼橋	 本村橋	 明石橋	 六一A橋	 五八A橋	 一〇八A橋
						 一一九F橋		
	ロマネスク調高欄	 新堅川橋						
形が特殊で判定不可能なもの		 猿子橋	 亀島橋	 黒亀橋	 神田橋	 千船橋	 一六A橋	 一一七D橋

### 3. 様式配置及び考察

様式判定一覧を基にして、親柱と高欄について地図上に意匠の配置を行った。

今回、様式判定を行った親柱 151 橋と高欄 181 橋の内

で場所の確認できたものについて、地図上に位置を記したので様式判定を行った数より親柱では 102 橋(67.5%)、高欄では 114 橋 (63.0%) を地図上にプロットする作業を行った。

表 - 3 親柱の意匠数

記号	名称	数
留柱	□ 四角柱型	7
	■ 水平面断面L型	14
	◇ 円柱	1
	◆ その他	2
和風	▲ 摱宝珠	1
	△ 頭巾	29
	▼ その他	1
☆	新古典主義	4
近代建築	● 表現派	2
	◎ 構成派	5
	○ アール・デコ調	12
	○ 準アール・デコ調	21
+	ロマネスク調	1
※	中華様式	1
△	特殊な形	1
合計		102

表 - 4 高欄の意匠数

記号	名称	数
高欄飾	□ 縦桟型	14
	■ 横桟型	5
	◆ その他	1
和風	◇ 石張高欄	3
	▲ 摱宝珠	1
	△ 頭巾	29
	▼ その他	2
×	I型断面材	10
☆	新古典主義	2
近代建築	● 表現派	1
	◎ 構成派	5
	○ アール・デコ調	5
	○ 準アール・デコ調	28
+	ルネサンス調	3
*	ゴシック調	3
+	ロマネスク調	1
△	特殊な形	1
合計		114

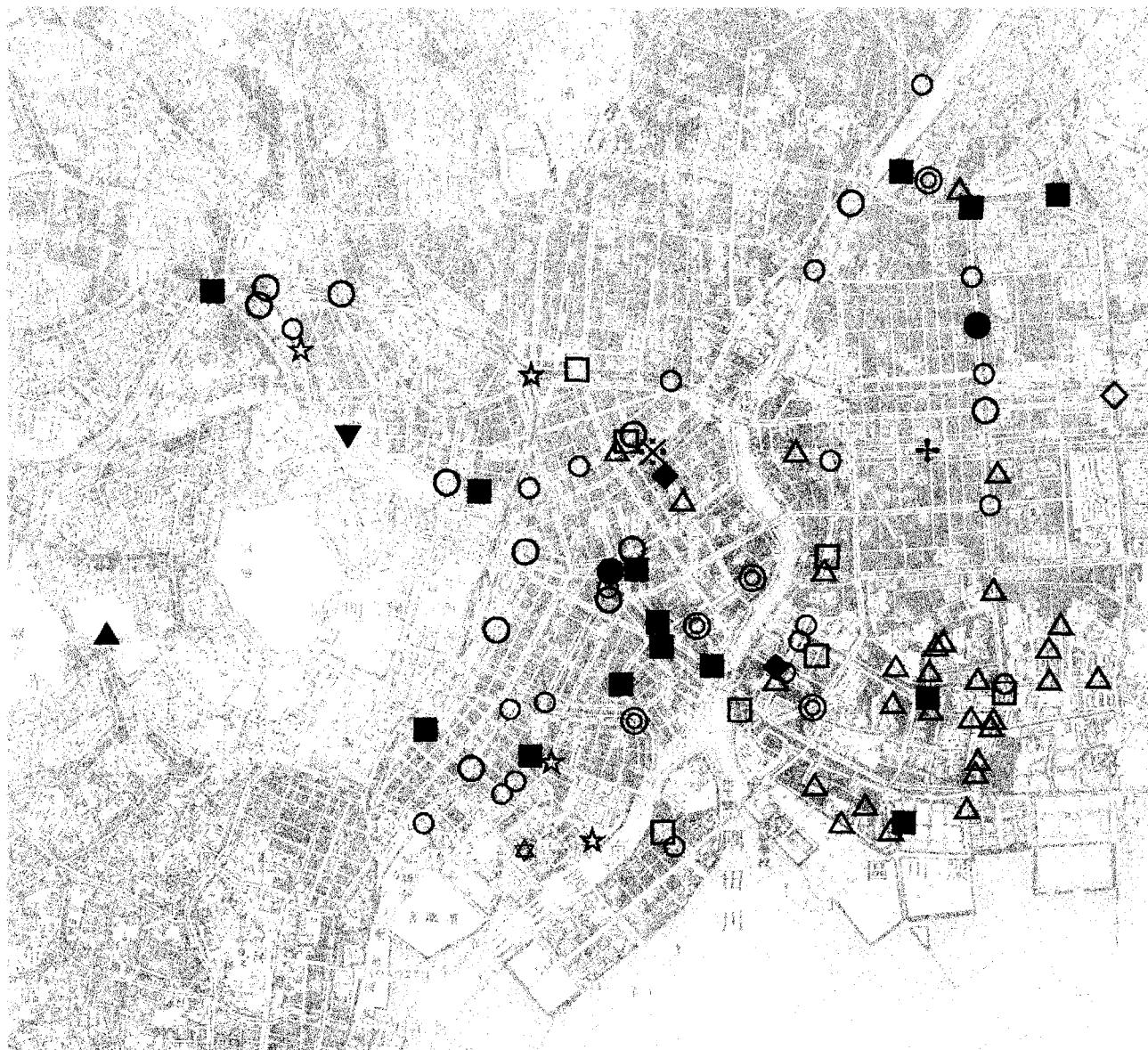


図-21 親柱の意匠配置図

#### (1) 深川区における和風橋梁（頭巾タイプ）

本研究で得られた意匠配置図からはほとんどの様式に偏りは見られなかつたが、旧深川区にあたる（現在の江東区）には、頭巾タイプ（△マーク）橋梁が多く配置されていることがわかる。

そして頭巾タイプ以外の和風の橋梁は旧深川区には見られず、他の地区に存在していることもわかつた。

また、このことは我々の研究室の研究活動の既存論文<sup>13)</sup>でも藤澤が述べていることでもあり、本研究で意匠配置図に表わすことで確認することができた。

さらに、復興局が震災復興橋梁架設後に編集した「帝都復興事業誌」<sup>14)</sup>には以下のような記述がある。復興事業に関する国（内務省復興局）作成の公式文書である。

を明瞭に表示するものと、しからざるものとがある。

河川幅広き橋梁あるいはその觀を与えるにふさわしい地点の橋梁には、前者の主旨をもって、特に親柱をたて、高欄、燈柱にも趣を与えたが、これに反して、街頭繁華にして橋長短き橋梁においては、特異の意匠を作らず單純ならしめた。

ここにあるように、高欄は橋の存在感を出すものと、そうでないものを使い分けていたようであり、頭巾型の橋梁は入堀に多く存在したことなどからも橋長は決して長くはなく、同様のタイプの橋梁が多く架けられていたことから、旧深川区では凝ったデザインは行なわれていなかつたように考える。

#### 第三節 設計 第一項 設計要項

##### ——第六目 意匠及び照明——

###### 高欄・燈柱のデザイン

路面上より望む橋梁の外観には、ここに橋ありとの觀

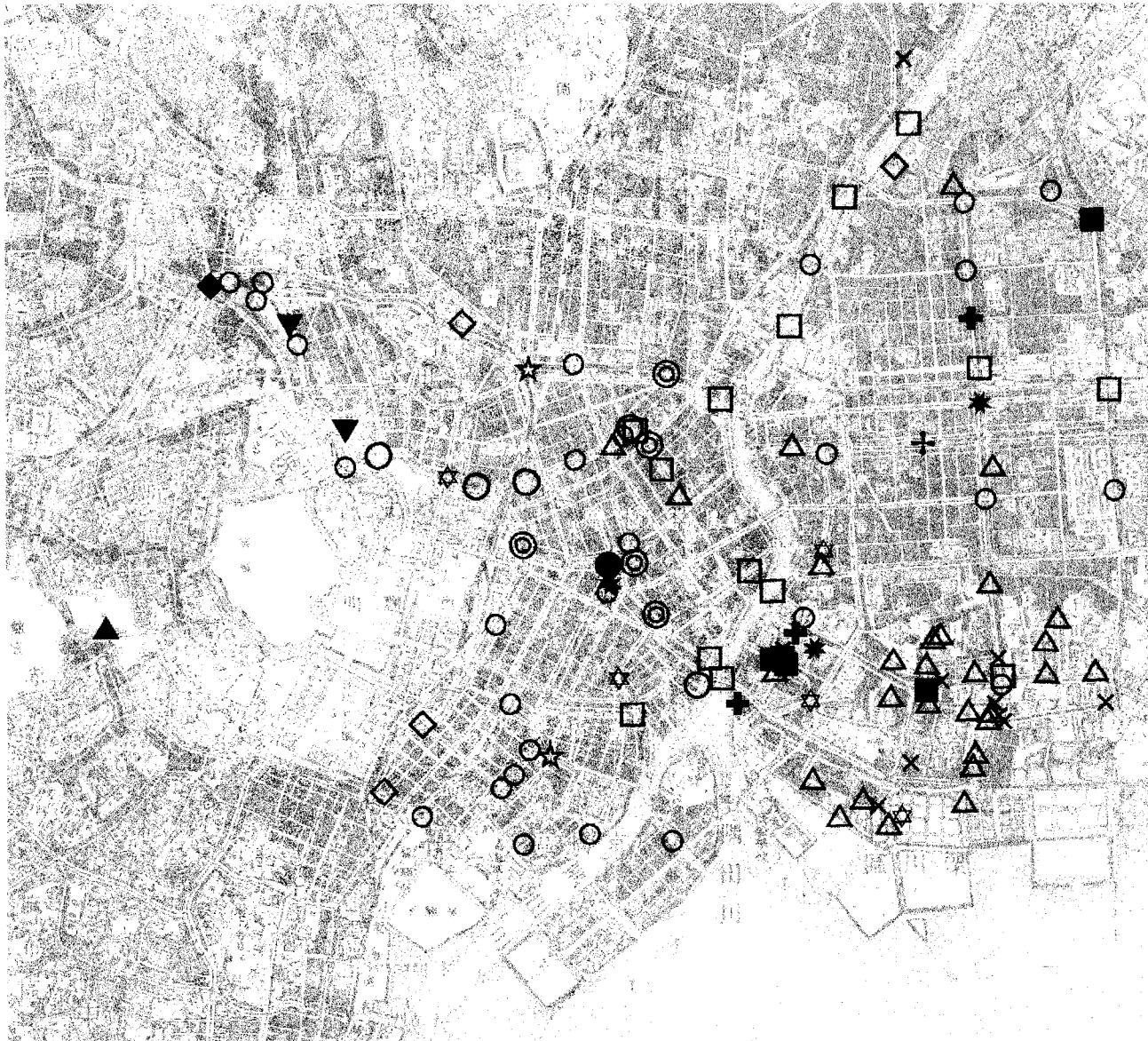


図-22 高欄の意匠配置図

### (2) アール・デコについて

様式別に見てみるとアール・デコ調がデザインされている橋梁（準アール・デコ調を含む）は、様式分析を行なった親柱 151 橋のうち 37 橋であり、西洋式の区分（和風の様式や中華様式を除外する）から考察すると、親柱では 43.2%（33 橋 / (151 橋 - 66 橋)）、また高欄においても同様な作業を行なうと、32.5%（37 橋 / (181 橋 - 67 橋)）（66 と 67 は和風の橋梁のもの）など高い割合を占めていることがわかる。

しかし、分布的な偏りは見られなく、各地域に幅広くアール・デコ調の橋梁が配置されているように思われる。しかし、隅田川右岸左岸地域に分けて考えると右岸地域に多く存在していることがわかる。（親柱について、右岸 24 橋、左岸 9 橋。また高欄について、右岸 25 橋、左岸 8 橋。）

さらに本研究で親柱と高欄の両方の様式分析ができたものは全部で 132 橋であった。そのうちアール・デコ調の様式を含む橋梁は 19 橋存在した。これも西洋式の区

分から考察すると、全体の 28.8%（19 橋 / (132 橋 - 66 橋)）であり、このことからも震災復興橋梁においてアール・デコ調のデザインが多く利用されていたと考えられる。

### (3) 無装飾高欄について

アール・デコ調のデザインが多く利用されていたのに対し、隅田川の橋梁の高欄のデザインには無装飾高欄が多く存在しており、意匠性に配慮されていないように思われる。また、本研究で確認できたトラス橋 6 橋のうち 5 橋が無装飾高欄であったこのことからもトラス橋では外観から見たときに意匠性のあるものだと錯綜感が生じるためではないかと考えられる。また外部の景観に限って言えば、このように橋長の長い橋梁には視点場が比較的遠くなるので細かい意匠は好まれないなどの要因があったのかもしれない。

隅田川の橋梁については（1）で記述した「帝都復興事業誌」の一文「河川幅広き橋梁あるいはその觀を与えるにふさわしい地点の橋梁には、前者の主旨をもって、

特に親柱をたて、高欄、燈柱にも趣を与えた」と整合していないように思われる。

#### 4.まとめ

今回の研究で少なくとも親柱においては 15 分類、高欄では 16 分類のバリエーションが存在していたことがわかった。さらに帝都復興事業においてアール・デコ調の橋梁が多く架設されたということが様式分析を行った上で考察することができた。

しかし、本研究で取り上げた橋梁は震災復興橋梁の 3 割程度に過ぎなく、今後、さらに橋梁数を増やして地域特性を見ることができれば、さらに多くの特性や意匠のバリエーションが見ることができるとと思われる。

#### 参考文献

- 1) 岡田孝, 伊東孝 :『震災復興橋梁の計画とデザイン的特徴』, 土木史研究 No. 4, pp. 55–70, 1984
- 2) 福島秀哉, 中井祐 :『周辺環境との関連性から見た帝都復興橋梁の形式選定原理の考察』, 土木史研究 No. 24, pp. 177–182, 2004
- 3) 窪田陽一, 伊東孝 :『震災復興橋梁の構造形式と架設の経過に関する考案』土木史研究 No. 6, pp. 58–67, 1986
- 4) 東京印刷株式会社編 :『開国記念日本橋誌』東京印刷, pp. 141~143, 1912 年
- 5) 国土地理院 :『古版地形図 大正 10 年頃の東京 (5 万分の 1)』
- 6) 東京公文書館所蔵図面
- 7) 復興局土木部橋梁課 :『橋梁設計図集 第六輯』, シビル社, 1928 年, pp. 10, 26, 28, 32, 37, 39, 47, 49, 50
- 8) 土木デジタルアーカイブス :『関東大震災復興工事関係写真』, 土木学会図書館
- 9) 西田雅嗣, 矢ヶ崎善太郎編, 『図説 建築の歴史 西洋・日本・近代』, 学芸出版社, 2003 年, pp. 58 (文章引用), 76, 91, 126, 128, 131
- 10) 日本建築学会編 :『近代建築史図集 新訂版』, 彰国社刊, 2004, pp. 40, 41, 44, 45, 46
- 11) BUTTER WORTHS : A HISTORY OF ARCHITECTURE , Sir Banister Fletcher's , pp. 383, 385, 1987
- 12) 様式一覧表については、『東京公文書館所蔵図面』と『橋梁設計図集 第四~六輯』, 『関東大震災復興工事関係写真』から、意匠の細部までわかるものを参考にした。
- 13) 藤澤加奈子, 窪田陽一, 深堀清隆 他 3 名 :『震災復興橋梁に設計における標準的仕様に関する分析』土木史研究 No. 22, pp. 235–240, 2002
- 14) 復興事業局 :『帝都復興事業誌 土木編 上巻』, 1931